

第15回宇宙開発委員会（定例会議）議事次第

1. 日 時 昭和47年12月13日(水)
 午後2時～4時
2. 場 所 宇宙開発委員会会議室
3. 議 題 (1) 宇宙開発委員会技術部会報告について

 (2) 宇宙開発協力に関する欧州宇宙研究機構
 (E S R O) との書簡交換について
4. 資 料

 委15-1 前回議事要旨

 委15-2 宇宙開発委員会技術部会報告

 委15-3 S E S ノート

 委15-4 第6回ロケット打上げ実験報告書

 委15-5 宇宙開発協力に関する欧州宇宙研究機構
 (E S R O) との書簡交換について

第14回宇宙開発委員会（定例会議）議事要旨

1. 日時 昭和47年11月8日
午後2時～4時
2. 場所 宇宙開発委員会会議室
2. 議題 昭和48年度8～9月期ロケット打上げ
実験の評価について
4. 資料
 - 委14-1 前回議事要旨
 - 委14-2 昭和48年度8～9月期ロケット打上げ
実験の評価について案
 - 委14-3 M-4 S-4号機実験報告
 - 委14-4 L S-C型ロケット6号機打上げ実験結果の
概要

5. 出席者

宇宙開発委員会委員

〃

〃

〃

説明者

東京大学教授

〃

山 県 昌 夫
網 島 毅
吉 識 雅 夫
八 藤 東 禎

斎 藤 成 文
森 大吉郎

宇宙開発事業団副理事長

〃 打上管制部長

関係省庁職員等

科学技術庁研究調整局宇宙開発参事官

文部省大学学術局審議官

通商産業省重工業局次長

通商産業省工業技術院総務部長

運輸省大臣官房参事官

気象庁総務部長

〃 〃 気象衛星準備室

郵政省電波監理局審議官

建設大臣官房技術参事官

東京大学宇宙航空研究所業務課長
事務局

科学技術庁研究調整局宇宙企画課長

松 浦 陽 恵
榎 博

山 野 正 登
笠 木 三 郎
(代理：鈴木)

北 村 昌 敏
(代理：伊藤)

塚 本 保 雄
(代理：原田)

佐 藤 久 衛
(代理：池田)

石 原 明
(代理：渡辺)

高 谷
高 田 静 雄
(代理：林)

宮 崎 明
(代理：須田)

大 野 勝 男

松 元 守 他

6. 議事要旨

(1) 前回議事要旨について

第13回宇宙開発委員会（定例会議）議事要旨が一部修正
の上承認された。

(2) M-4 S-4号機実験報告について

斎藤成文および森大吉郎東京大学教授から説明が行なわれ
たのち、以下の質疑応答が行なわれた。

網島：電源系統の故障は、全体的なものか。

斎藤：故障の原因は、電子フラックス測定装置のうちの高電圧回路における放電である。その結果、過電圧に弱い半導体等の部品が損傷し、現在、+4 V、+6 V、+12 V、-12 Vの4系統の電源系のうち、+6 V、-12 Vに異常を生じている。

また、この放電の結果、観測データの符号化装置が故障した他、コマンド受信機についても、コマンド項目を判断する機能が低下し28項目のコマンドのうち13項目しか動作していない。これらの故障にもかかわらず、アネログのデータ送信部は正常であり、テレメータは136 MHz帯が完全に正常な動作をし、400 MHz帯も若干の性能低下はあるが動作をしている。

網島：放電は何V位で起つたのか。

斎藤：電子フラックス測定装置（EBA）の高電圧系には、3KVと2KVとがあり、電源を入れた時、それに放電が生じたと思われる。

網島：予備実験は行なっていたか。

斎藤：十分行なつたつもりであつた。

網島：放電の原因は何か。

斎藤：衛星は十分な高度の軌道上にあり、通常の状態では放電は起らない筈であつた。耐圧対策として行なわれた樹

脂の充填技術に問題があるのではないかと考えている。

網島：ランチャ角度の誤差2度というのは大きすぎないか。

森：ランチャ角度の設定は0.5度きざみとして0.1度極度の誤差範囲になることを目標としていた。これは、5月に行なつた角度の調整後狂いを生じたものと思われる。

山県：歯車の狂いではないのか。

森：ゴミ、すす等が付着したことにより、ランチャ角度の操作の際、狂いを生じたものと考えられる。

山県：ONESによる観測の話は、いつ頃からあつたのか。

斎藤：「おおすみ」以前から観測の話はあつたが、多くの準備作業が必要であり、また、当時としては、軌道にのつたことの確認作業に主力をそそいでいたため、実現していなかつた。本年春、ONESからあらためて話があり、追跡のみでなく、テレメータ受信も行なつてもらふことになつたものである。この結果、衛星が有効なデータを送つてきた間の貴重なデータを入手することができた。

(3) L-6-C型ロケット6号機打上げ実験結果について

宇宙開発事業団松浦陽恵副理事長および榊博打上管制部長から説明が行なわれたのち、以下の質疑応答が行なわれた。

吉誠：15Gを越えるエンジン振動が起つたようだが、燃料もれが起つた時に火が着くということにならないか。

松浦：燃料と酸化剤が同時にもれることがない限り大丈夫である。

今回は、燃料のフレキシブルパイプの接手の弱い部分が異常振動により損傷したと思われるが、異常振動さえなければ十分な強度のものである。Nロケットにおいてはこの部分の型式が異なり問題はない。

網島：油圧は、途中から正常に戻つたのか。

榊：2回零となり2回復元した。その後は十分な作動状態にあつた。

1時2/
網島：回路の一次断線のようなものか。

松浦：ハンダ付け部の接続不良が原因と思われる。

榊：同種の油圧ポンプの地上試験によつて同様な結果を得た。

山県：LS-Cは7号機までか。

松浦：6号機まででジンバル、ガスジェットの基礎試験をおわる。

7号機は、Nロケットと同型式のエンジンを塔載し、性能試験を行なう。

八藤：LS-C型6号機の打上げが延期になつたことについてはその後どのように処理されているか。

松浦：鹿児島県の当事者との話し合いを10月末に終え、善処することとしている。

(4) 昭和48年度8～9月期ロケット打上げ実験の評価について事務局から説明が行なわれたのち、原案どおり決定された。